未来からの由来

――ある女子学生にみる民族アイデンティティの形成過程――

門　野　里栄子

Origin from the Future : The Process of Constructing Ethnic Identity in a Young Woman

KADONO Rieko

Abstract : The purpose of this paper is to explore the process of constructing ethnic identity through the experience of a young woman. This woman was born in Osaka and has never been to Okinawa. However, she has nostalgia for Okinawa. Her nostalgia contains the positive image of the "Southern Island" and the negative image of the "Battle of Okinawa." She feels a sense of "home" in both ideas, and is proud of Okinawa. In the past, this woman was teased by her classmate because of her stutter. In these times of trouble, she sought after her ancestors. Her grandfather was Okinawan and he had told her about his experience in the Battle of Okinawa, which caused her to regard her life as similar to her ancestors and gained strength to try to carry out her mission of talking about the Battle of Okinawa. She senses that she can find something to give to Okinawa. Her origin of ethnic identity will be constructed in the future, not in the past.

Key Words : ethnic identity, OKINAWA, inheritating experiences

1. 私の祖先は沖縄人である

私の祖先は琉球王国からの沖縄人である。
祖父が私に沖縄戦での話をしてくれたこと，今でもずっと覚えている。
目を閉じれば浮かぶ，戦火の中逃げまどう人々…　洞穴にかくれる人。
また，祖父の兄は沖縄で遺骨収集をしている。
亡くなった方の家族の元へ，それさえむずかしい方もたくさんいて，
その人たちはきちんとお墓に埋葬される。
祖父も，祖父の兄も，親戚も，今私の中に流れるこの血，
沖縄の心も，私は誇りに思うし，大すきだ。
三味線の音が心をいやす。「島唄」や「涙そうそう」の歌に，
育ったことはない沖縄の地であるのに，愛おしささえ感じる。
沖縄に今度行くときは，今までよりきっと何か大きなものを持っていく。
それは目に見えないし，自分でもよくわからないけど，
必ず私の中にある。

19 歳，大学 1 年生の女子学生が書いた文章である[1)]。ここで語られているのは，自己のルーツとしての沖縄，その地で過去にあった沖縄戦，今も継続中の遺骨収集，「沖縄の心」に対する郷愁，そして自分の中に確実にある

未知の何か，である。人が自己を確認するうえで重要な根拠とされるものの一つに，「民族アイデンティティ」があるが，その言葉では言い尽くせないものがここで語られていると感じる。これまで私がテーマとしてきた，過去の経験や出来事の継承という課題を考えるうえで，民族アイデンティティはどう関わるのか（あるいは関わらないのか），民族アイデンティティの源泉はどこにあるのか，民族と無関係と思われる経験は民族アイデンティティと関係するのかしないのか，自己の由来と未来はどのように結びつくのか，といった問題を考えてみたい。

アイデンティティは，「語る」ことなしには成立しえない。というよりは，自己について語ることが，アイデンティティである。そして自己を語る中には，自分の過去，現在，未来のすべてが含まれる。しかしながら，「自己について語る」という時，多くは「過去の自分」が想定される。なぜなら，自己を語る対象として取り出そうとすると，すでに経験された過去の自分が比較的明確で安定しているからである。アイデンティティとは，語る対象として固定化されたものではなく，自己を語る遂行的な行為において見いだされるものであろう。そして語られる自己には，明確で安定した過去の自分だけでなく，不安定な現在も，未知の未来も，あるいは自分でも思いもよらない何かが含まれているはずである。

本稿では，経験としてはあいまいな語りの内容が考察される。一般的な研究において分析の対象とされるのは，現前するデータである。語り手自身にも明確ではない内容については，分析に値しないか分析不可能として除外されがちである。そうした言語化されない不明瞭なことがらを考察するにあたり，情動を扱う社会学や無意識を扱う精神分析の概念を援用した。また，「本土」に生まれ育った 19 歳の若者を対象者にすることで，地理的な「沖縄」に限定されず，組織的な取り組みでもない継承の可能性を探ってみたい。

対象者 K さんへのインタビューは 2 回行った。第 1 回は 2013 年 12 月に彼女の所属大学で約 1 時間半，第 2 回は 2014 年 11 月に私の所属大学で約 2 時間行った。この 2 回のインタビューの間には，Y さんにとって念願だった沖縄旅行の実現がある。2014 年 8 月に，父親と二人で 4 日間滞在した。

2. 構築される「沖縄戦」の光景

K さんは，1994 年に大阪府寝屋川市で生まれた。父親は大阪生まれ，母親は山口で生まれてまもなく大阪府堺市に転居した。5 歳上の姉がいる。父方の祖父は沖縄生まれで，大阪へ移住後，大阪市内に住んでいた。K さんが中学 3 年生の時に，77 歳で亡くなる。彼女の生活基盤は，出自も含めて大阪にある。その彼女が，沖縄戦の光景が「目を閉じれば浮かぶ」という。この光景の源泉となっているのは，本人も認めているとおり「祖父が私に沖縄戦での話をしてくれたこと」であり，そのことを「今でもずっと覚えている」という経験にある。まずは，明確に語ることのできる経験から，考察を始めよう。

(1) 祖父の「沖縄戦」

大阪で生まれ育った K さんにとって，「沖縄」に触れる窓口は祖父だった。祖父から語られる沖縄は，おもに沖縄戦の話である。自分たち以外に誰かいたのかもしれないが，幼い彼女の記憶の中では，部屋で祖父と二人だけの場で聞いた。

> すごい印象に残っているのは，空から降ってくる爆弾とかを避難するための洞穴っていうんですか，（聞き手〔以下「＊」と表記〕：ガマ）ガマっていうものがあって，そこに逃げ込んでいる人たちがたくさんいたけど，米軍によって爆弾を投げられてたくさんの人が亡くなったっていう話を聞いて，それがすごい印象的で。こういうことがあったんだよって聞いて，すっごい怖くって，今でもすごく覚えているんですけど。

実のところ，戦火の中を逃げ惑ったり洞穴に隠れたりした体験が，祖父自身の体験なのか他人から伝え聞いた話なのかは定かでない。しかしながらここで重要なのは，祖父が実際に体験したかどうかではなく，沖縄戦の話を沖縄生まれの祖父から直接聞いたことである。それが後々，K さんが自らのルーツをたどるうえで重要な経験となる。

小学校低学年の頃に聞いた沖縄戦の話を「今でもすごく覚えている」ということは，それを聞いた体験が反復

されているか，別の形で更新されているはずである。沖縄戦の話は祖父から何度も聞いている。そしてインタビューの中で K さんが語った「沖縄戦」は，これとは別の体験のなかにも見出すことができる。

(2) 劇の「沖縄戦」

小学校低学年の頃，地域の寝屋川市立総合センターで沖縄戦の劇が上演された。

> その劇を観に行くことになったんですよ。それでやっぱり，まだ 10 歳にもならなかったので，劇を観てもあまり意味がわからなかったとこ〔ろ〕とかあるんですけど。でもすごく記憶に残っているのは，沖縄戦の風景だったりとか。あと爆弾が落ちる音とかをすごい表現してたので，すごく怖くて，怖くて怖くて。その沖縄戦の〔劇〕を観てから，あまり眠れなくなったりとかもして。

記憶に残っている劇中の風景，あるいは祖父から聞いた印象的な話は，沖縄戦としてよく知られている光景であり，決して特別なものではない。しかし K さんにとっては，祖父から聞いた話が劇中とはいえ目に見える形で「再現」され，ある種のリアリティをもって体験される。それは「怖い」という感情をともなう記憶であり，同時に劇中で流れていた曲は今では特別な感情を喚起するものとして記憶されている。

> その時に流れていた沖縄の音楽だったり，（＊：後で何の音楽かわかりました？）たぶんなんですけど，えっとワラジガミ？（＊：「童神（わらびがみ）」）その曲が流れていて，その歌を聞いたらなんかこう，ジワ～っと中からこみあげてくるものがあって。最近，いろいろ先祖のことだったり，沖縄のことを知りたいなと思い始めてから，沖縄のそういう，民謡かどうかわからないんですけど，こういう歌だったりとかを聴いて，なんかこう，「祖国を知る」ような気持ちになったりとかするので，聴いて落ち着いたりとかしますね。

沖縄戦の光景は，「沖縄の音楽」を介して「『祖国を知る』ような気持ち」にも結びつけられている。ただし，「沖縄の音楽」として K さんの心に留められている「童神」は，本人が推測するとおり，沖縄民謡ではなく沖縄風歌曲である。作詞は沖縄民謡歌手の古謝美佐子だが，作曲は「本土」出身で夫の佐原一哉が手がけている。1997 年に作られたこの現代音楽が，後述する沖縄へのノスタルジアを作り上げている。

(3) 被爆体験者が語る光景

沖縄戦について語る中で触れられた，もう一つの忘れられない光景がある。それは，小学校 6 年生の時に修学旅行で訪れた広島である。原爆ドームや平和記念資料館を見学し，被爆体験者の語りを聞いた。

> その方の話が，ほんとに私の中に入ってきて，話の一言一言が，なんていうんですか，こう，頭の中にふぁって。それを私は見たわけではないですけど，映像を見てるかのように浮かんで来たりして。その時に小学校低学年の時に見た沖縄戦の劇のことも一緒に思い出したりとかして。

K さんは沖縄戦と広島の原爆について，体験もなければ知識もあまりない。むしろそのことによって，個別の出来事という枠を越えて 2 つの出来事に関する体験が相互に参照され，各々が他方をより鮮明に映し出すのではないかと思われる。ここでは，「怖さ」が別の出来事を喚起し，2 つを結びつける回路となっている[2)]。

上記に引用した語りは第 1 回インタビュー時のものである。第 2 回，つまり沖縄旅行後にインタビューした時にも，沖縄戦当時の避難壕の一つであるアブチラガマ[3)]の話をしている中で，「ふと思い出したんですけど」と改めて修学旅行時の体験が語り出された。この時の語りはより具体的で，疑似体験とでも呼びうるものだった。

どこか地下の部屋で，被爆体験者から原爆が落ちる前後の状況を聞いている時だった。

> すごい想像して。その人の話す一言，一言が，それが一つずつ，一つずつ，空間のようになっていって，爆弾が落ちるっていう瞬間に，私，目の前がすごく光って，立ってられなくなってしゃがみ込んでしまって。

これと同様の感覚で想像したのが，沖縄旅行時に訪れたアブチラガマだったのである。後述するが，実はアブチラガマには入ろうとして入れなかった。ただ，そこへ行く前に旧海軍司令部壕や大叔父の私設戦争資料館を見学している。当時のままの旧海軍司令部壕の中に入った時の空気だったり，弾痕がある壁に触れたりすると，亡くなった人たちの悲鳴が聞こえてくるかのようだったという。

> 一つ一つの話だったり，一つ一つの物体，銃弾の痕だったり，その時戦争があったっていう「証拠」じゃないんですけど，一つ一つが一つのところに集まって，それが空間になっていくイメージ。

小学校 6 年生の時に広島で被爆体験者の語りを聞いている中で，それ以前の小学校低学年時に観た沖縄戦の劇が再現され，20 歳になって訪れたアブチラガマを前にして，過去の原爆の語りを聞いた時の感覚がよみがえる。幼い頃から聞いていた祖父の沖縄戦の話に，これら複数の体験が織り重ねられ，現在の K さんにとっての「沖縄戦」が構築されている。

（4）沖縄戦と「沖縄人」

過去の沖縄戦を現在へと引き寄せる装置の一つが，ほとんど会ったことのない祖父の兄弟たちである。祖父のすぐ下の弟である大叔父は，沖縄で約 60 年間にわたり遺骨収集をしており，現在も継続中である[4)]。大叔父が作った私設戦争資料館には，身元不明者の遺品をはじめ，手りゅう弾や薬莢，薬品の入った瓶など無数の遺留品が収められている。K さんにとって一番印象的だったのは，消毒や麻酔の液体が入った未使用の瓶，あるいは掘り起こした時には毒ガスが入ったままだったという容器を見た時に，「時間」ではないと感じたことである。70 年近く前にあったものを「見て触れて感じる」ことができる説得力である。また，祖父のすぐ上の兄である大伯父も，当時通信兵として激戦を生き残り，仲間の遺骨収集や遺族探しをしている[5)]。大おじたちが行っている遺骨収集は，埋まったままの遺骨を現在に甦らせるという点のみで重要なのではない。それは，割合は少ないものの遺骨が「家族の元へ」返されることによって，「祖先」へとつながるのである[6)]。

この二人の大おじを含め，ほとんどの親戚と面識がない。沖縄には幼い頃に一度行ったきりで，今回の沖縄旅行まで漠然と大おじたちのような親戚がいるということしか知らなかった。しかしながら，祖父が語ってくれた沖縄戦を，大おじたちの遺骨収集が現在までつないでくれている。逆の言い方をすれば，K さんにとってほとんど面識のなかった親戚へとつなぎ，彼らとともに共有している「今私の中に流れるこの血」を確認させてくれるものが「沖縄戦」なのである。

3.「沖縄」へのノスタルジア

インタビューでは，なぜ沖縄に強い関心や親和性を持つようになったのか，なぜ自らの帰属を沖縄／琉球に求めるのかという疑問を，幾度となく異なる聞き方で投げかけた。まず，中学生の頃から沖縄というものに誇りを感じてきたという K さんに，「小さい頃，関心を持つ頃，誇りに思える頃の，沖縄のイメージ」を聞いてみた。

（1）「異国」としての沖縄

K さんがはじめて体験した沖縄は，保育園児の頃の家族旅行である。かすかな記憶ではあるが，大阪の日常生活にはなじみのない「異国な感じ」がした。

> その時に温かい，どちらかというと暑いんですけども，あったかい気候と，食べ物だったり，伝統的な住宅だったり，文化とか風土だったり，すべてがこう惹きつけられるものがあったので。

幼い子どもに「文化とか風土」が理解できたとは考えにくいが，「あったかい気候」という皮膚感覚や「すごい楽しかった」という幸福感の記憶をもとに，遡及的に「すべてが惹きつけられるものがあった」と認識されているのだと思われる。ここで重要なのは，そうした記憶のされ方よりも，「異国な感じ」という言葉で表現される，

すでに大正・昭和初期からあった沖縄観光ブームに見られる「南島イメージ」である[7]。

次節でも触れるが，K さんが沖縄への帰属意識を持っているからといって，必ずしも沖縄／琉球について熟知しているわけではない。沖縄に惹きつけられるイメージは，世間一般でいう南島イメージにすぎないとも言える。ただし，それに尽きるわけでもない。K さんが幼い頃の沖縄旅行でのイメージを語った後で，それと並列的に取り上げられたのが，前章で触れた小学校低学年の頃の「劇の沖縄戦」のエピソードである。K さんの記憶の中にある「沖縄」には，異国／南国のイメージとともに沖縄戦のイメージがあり，両者が共存する「沖縄」に「祖国」を感じているのである[8]。

(2)「愛おしい」沖縄

幼い頃の「異国な感じ」という漠然とした沖縄イメージが，今では「三味線の音が心をいやす」，「『島唄』や『涙そうそう』の歌に（中略）愛おしささえ感じる」といったより具体的な心情となった。これを，一般的な沖縄イメージから民族的な心情への変化，とみなしてよいのだろうか。

沖縄では三味線のことを「三線（さんしん）」と呼ぶが，K さんはそれを知らないのか「三味線」と書いている。また，「『祖国を知る』ような気持ち」をいざなってくれる「童神」は，すでに述べたとおり，沖縄風歌曲であって沖縄民謡ではない。「島唄」や「涙そうそう」も同様である。K さんのいう「島唄」とは，本来の意味とされている奄美群島の民謡ではなく，1992 年にヒットした「本土」のグループ「THE BOOM」が歌う「島唄」である。「涙そうそう」は，「本土」出身の森山良子が作詞し，沖縄のグループ「BEGIN」が作曲した曲である。1998 年に森山良子のアルバムに収録されたが，全国的に知られるようになったのは 2002 年頃からである。「童神」がより広く知られるきっかけとなった夏川りみによるヤマトグチ盤が出されたのも，2003 年である。K さんの心をいやす沖縄の歌の大半は，彼女が 10 歳頃にあたる 2003 年前後に流行している。つまり，2001 年にテレビ放映された「ちゅらさん」に始まる，いわゆる「沖縄ブーム」が背景にあると考えられる。

K さんが「沖縄の心」と表現する内容は，世間一般の若い世代が抱く沖縄イメージから隔たってはいない。沖縄に対する強い帰属意識と熱い思いを抱く現在でさえ，特別な民族意識とは言い難い。内容はありふれて見える沖縄への，「育ったことはない地であるのに」感じる特別な心情をどのように理解したらよいだろうか。

(3) 過去への憧れ

自分にとってゆかりのある場所に対する「愛おしい」感情について，フレッド・デーヴィスは『ノスタルジアの社会学』（1979＝1990）の中で次のように述べている。「家郷（home）」とはどのような形態であれ常に何らかの場所であるが，現代ではもはや地理的に特定された意味から切り離された「家郷型」の心情は，家郷そのものからはっきり切断されている。家郷だけではかつてのように「過ぎ去りし出来事の思い出」を呼び起こすことができないので，別のことば「ノスタルジア」が登場した（Davis, 1979＝1990： 10）。デーヴィスはノスタルジアの題材について，個人的に体験した過去に由来することを前提としつつも，決して過去がノスタルジアの体験の動機づけの源泉や誘発要因そのものであると言っていない。むしろ彼の主張の重点は，「われわれの現在の状況のなかのなにが呼び起こすにしろ，ノスタルジアは過去を利用しはするが――誤ってであれ，正確にであれ，あるいは後で述べるように特殊に再構成された仕方であれ――過去の産物ではない」（Davis, 1979＝1990： 17）とするところにある。したがって，過去の出来事にノスタルジアを感じられるかどうかは，それらが現在の状況のなかの出来事とか雰囲気，傾向とどれほど対照的なものであるかということに関係があるという。

K さん自身が体験した沖縄は幼い頃の沖縄旅行だけであり，沖縄について聞き得たことは祖父からの沖縄戦の話にすぎない。それでも「育ったことはない沖縄の地であるのに，愛おしささえ感じる」という K さんの心情は，単に古き良き沖縄なるものに魅惑を感じる懐古的感情と理解するのではなく，「ノスタルジア」の観点から考えてみる必要があるだろう。K さんは，沖縄戦にかかわる祖父の話や劇，沖縄に関する歌曲を通して「沖縄」を感じており，たとえそれがメディアによって創造された「沖縄イメージ」であったとしても「祖国」への愛おしさを抱いているのである。

4.「沖縄人」としてのアイデンティティ

K さんに，沖縄への帰属意識についてより踏み込んだ次の質問をした。「さっき『沖縄人』という言葉が出てきたけれども，まぁ言ってみれば，大阪の寝屋川でふつうに生活していたら，特別なことがなければ，日本人とも意識しないけども『沖縄人』とも意識しないでいるわけで。自分はなぜそういう沖縄のことにっていう？」。

（1）連続と非連続

K さんは，沖縄への帰属意識の理由について，みずから気づいていた。

> たぶん，今までの経験が大きいと思うんですけど。中学，高校の時がすごくしんどかった時期がたくさんあって。学校内での問題，いじめ問題とかもたくさんあって，そういうことを経験して，やっぱり生と死がすごく近い存在に思えた時期が何度もあったので，たぶん，人より私がここに生まれてきた運命だったり使命だったりとかを考えたりだとか。自分のなかでやっぱり，なんて言ったらいいんですか，「私は日本人である，そして沖縄人である」とどこかで思って生きていきたいなと。

K さんには吃音がある。とはいっても，聞き手の私からすれば，それとわからない程度のものである[9]。
祖先への関心について話題になった時も，「しんどい時期がたくさんあった」という言葉が重ねられた。

> 生きてるのか死んでるのか，全然わからないくらいに思ったこととかあって，いっそ死んでしまおうかとも思った時もあったので。やっぱりそれを考えた時に，じゃ，今まで 15，6 年しか生きてきてないけど，それは，母が生んでくれたからとかではなくて，ずっと元をたどっていけば，何千年も前に，古い時代までさかのぼっていったら，その時からの先祖がいて，何千年も命が引き継がれていって私がいるのだから，最低でも子孫を残したりだとかして生きていかないと，というふうに思ったので，どれだけしんどくても死んでしまおうという選択肢は生まれなかったです。どれだけしんどくても乗り越えて，今までなんとか生きてこれたので。

デーヴィスによれば，ノスタルジアがアイデンティティの問題と関連するのは，自己を意識する時に体験する連続と非連続の問題においてであり，ノスタルジアは連続への願望や同一であることの安らぎと結びつく。ノスタルジアの感情は基本的にいえば，過去を肯定する心情と不満に感じる現在の状況によって成り立っており，「現在についての嘆きに打ち勝つのは常に過去に対する賛美である」（Davis，1979＝1990： 25）。現在の状況が惨めで厳しく満たされないと感じられるほど，それに打ち勝つためには過去に対する大いなる賛美が必要となるだろう。中高生の頃の K さんは，吃音などによっていじめられ，「生きているのか死んでいるのか，全然わからないくらい」の状況にあった。そうした状況に打ち勝つためには，「母が生んでくれた」という事実だけでは不十分であり，生まれるよりはるか以前にさかのぼる祖先が必要だったのではないだろうか。

ノスタルジアが連続と非連続によって形作られる過程で，それが動き始めるためにはまず非連続が必要である（Davis，1979＝1990： 73-74）。つまり，ノスタルジアの感情は現在に満足できない状況の中で，連続を志向する過程において生起する。その場合の連続とは，単なる「過去からの続き」を意味するのではなく，不満な現在の自己を満足な自己へと変革するための連続と考えるべきではないだろうか。言葉を換えれば，新しい未来を志向する者にノスタルジアは訪れるということである。過去を維持したいだけならば，単なる懐古主義となる。たとえば，K さんは自分の名前の一字に，祖父と同じ「真」の字があることに，沖縄人としてのこだわりを感じている。父が祖父から聞いたという琉球王国の「尚真」王から賜ったという名前の謂われについて，インターネットで家紋を調べて照合し，それを信じようとしている。そして「将来もし子どもができたときには，絶対『真』っていう字をつけよう」と思っている。父の代にも姉にもつけられることなく一旦途絶えた「真」の字を，祖先から現在の自分に連なる謂われとしてさらに未来へつなげていこうとしている。「過去への憧れ」は，過去への回帰

や現在の停滞ではなく，未来への準備なのである。

同様のことで思い浮かぶのは，いわゆる「本土復帰」を前にした沖縄の社会的状況の中で，「沖縄的なもの」や「土着性」がクローズ・アップされたことである。その背景について，岡本恵徳（［1972］1992）は次のように述べる。

> しかし，むろん，沖縄の現実の状況で，「土着」的なものが強調され，「沖縄的なもの」の重視が叫ばれるのは，現実の政治的・社会的な状況の一層の閉塞化が予感されるからということだけにとどまるものではない。より一層深く，人間の生きている根源的なもの，個を内的に深く規制するもの（それが思想や文化をあらたな強靱なものとして創出したり，あるいは再生する基盤となるものに相違ない）に深くかかわるものとして意識されるからに他ならないのである。（岡本［1972］1992：42）

社会であれ個人であれ，閉塞的な状況でしかも手持ちの論理では打破できない中で，自己を新たに創造し強靱にするために選び出されたものとして，「沖縄人」がある。

（2）使命

K さんを「沖縄人」へと結びつけているのは，祖父から聞いた沖縄戦の話と祖先である。この 2 つは K さんにとって「使命」と位置づけられている。

> おおげさかもしれないですけど，せっかくこうやって生を受けて生まれてきたんだから，使命があるんじゃないかって自分のなかで，すごい最近〔思う〕。使命っていうものが自分にあるならば，それを成し遂げたいと思うので，それは何かと考えた時に，やっぱり祖先のことだったり，祖父たちが沖縄戦っていうものを体験したっていうことで，その体験を，私は直接は体験してないんですけど，それを後世に受け継いでいかなければならないなと思って。

自分に使命があるのかどうか，わからない。そもそも使命とは，他者から課せられる任務であり，みずから決定できる主体的な事がらではない。しかし，与えられた任務を遂行するかどうかは自分次第である。使命を引き受ける典型的な例として挙げられるのは，多くの犠牲者を出した出来事の生存者である。枚挙にいとまないが，たとえば沖縄戦における「集団自決」の生存者である金城重明氏は，証言を続ける理由を次のように語る。

> 心情的には忘れたい。しかし，“証言しなければならない”という内的な大きな力に押し出されて，語り続けてきました。それは，避けて通れない生き残りの大切な責任であり，使命だと認識しつづけております。（金城 1995：182）

金城氏にとって「生き残り」という自分にもたらされた運命が，「内的な大きな力」となっている。また，体験者の子世代は，親亡き後に自分に課された「課題」として引き継いでいこうとしている[10]。しかしながら「使命」という言葉によってみずからの役割を考えるのは，そのような具体的な根拠を挙げられる場合だけではない。たとえば大学の授業をきっかけに壕ガイドを始めた学生も，ためらいがちに「使命感」に近い感覚を持っている（『けーし風』59：20）。

K さんの場合は，自分が生まれてきたことに意味を見出すために使命をみずからに引き寄せ，「それは何かと考え」る。これからを生きていくうえで課題は必須でありながら，自分の中には具体的なものは何もない中での「何か」である。だからこそ，他者から課せられる「使命」という言葉が必要だったのではないだろうか。探し求めた先にあったのが「沖縄人」であり，具体的に何を行うべきかを考えた時に，祖父から聞いた沖縄戦を語り継いでいくことが使命としての意味を帯びる。使命は他者から与えられるものであるため，いわば当初は自分の側にそれを全うするだけの資源や根拠がなくても構わないのである。「沖縄の」，「体験者の」という特定の資格者による所有格を伴わない，使命を引き受け，覚悟をもって臨もうとする者たちの「沖縄人」や「沖縄戦」があるだ

ろう。

（3）覚悟

20 歳になった K さんがみずから希望してようやく訪れた沖縄だったが，後悔したことが一つある。アブチラガマに入れなかったことである。地元ガイドから，亡くなった人たちの魂があるので半端な気持ちじゃ入れない，と釘を刺された。ガマに近づくにつれて，顔が真っ青になっていった。ガマの入り口で，ガイドが死者に祈るために手を合わせ，これから中に入ろうとする者たちの名前と出身を告げていた。K さんは直前になって，入れなくなった。

> 自分でもショックだったんですけど，祖先のことを調べたいとか戦争のことを知りたいって言っていたにもかかわらず，いざ入るってなったら入れなくて，覚悟がなかったんだなっていうのをすごく実感しました。本とかで勉強するだけじゃ全然わからないし，でも〔現地に〕行ってみても覚悟がなかったり，そこで亡くなった方について深く考えられていない自分を知ったっていうか。

K さんは入れなかったことをひどく後悔し，そんな自分を情けなく思っていた。しかしながらすでに述べたように，ここを訪れる前に旧海軍司令部壕などで当時の「証拠」に触れ，死者たちの声を想像していた。それは，沖縄戦に対する知識や自分よがりの思いだけではなく，死者の世界に一歩踏み込んでいることを意味するだろう。壕の外で待っている間も，真っ暗な入り口を見ながら雨の中で一人，戦争当時たくさんの人がここで座ったり立ったり走ったりという状況を感じていた。壕に入れなかった体験もまた，沖縄戦を語り継いでいくことを使命とする K さんにとって必要であり，覚悟のない自分を思い知ることによって一旦立ち止まり，これから何をすべきかをより深く考えていくきっかけとなる。

岡本が指摘するように，沖縄に生まれ育った者が「沖縄人である」ということではなく，自己のうちに「沖縄人」としての特質を自己の生き方との関わりにおいて意識し，それと対峙する時，初めて「沖縄人となる」のである（岡本［1972］1992：60）。

5. 未来からの由来

（1）何か

> 沖縄に今度行くときは，今までよりきっと何か大きなものを持っていく。

このように書いていた K さんだったが，実際に沖縄に行ってどうだったのだろうか。訪沖の目的は大きく 2 つあった。繰り返し述べられている，沖縄戦と祖先について知ることである。実際，沖縄に行って得たものは多い。何度か会ったことのある大伯母から，曾祖父母のことや先祖にさかのぼる出身地の話を聞き，大叔父から祖父とともに体験した沖縄戦当時の話を聞いた。そして初めて会う父のいとこ家族は，初対面とは思えない歓待をしてくれた。

> 沖縄に行って親戚に会って話を聞くことによって，私が一番感じられたことは，本当の私のふるさとは，生まれ育ったところは大阪ですけど，でも本当の意味でのふるさとは，やっぱり先祖のいた所にあるんだなっていうことをすごく実感して。

生まれも育ちも沖縄という親戚の中に，スッと入っていける自分がうれしかったという。そうした親戚との関係の中で，「本当の意味でのふるさと」が見出される。

沖縄で大きなものを受け取った一方で，K さんは沖縄に何を持って行ったのだろうか。行く前は，「それは目に見えないし，自分でもよくわからない」と書いていた。しかし「必ず私の中にある」とも書いている。沖縄旅

行後に「それ」が何かわかったのかを尋ねた。返事はなかなか返ってこず，考えあぐねたうえで，こう答えた。

> 祖先のことを調べたいというきっかけにもなったり，沖縄戦のことについても調べようと思ったり，2つのことに共通しているのは，祖先が沖縄ということである，なんだろう，今も生きている私のからだの中にある「血」，じゃないんですけど。そういう行動を引き起こしたのが，私の中にある，たぶんすごく薄いですけど，「沖縄人」がほんの1% でも残っているという力が，8月の沖縄旅行に引き寄せていったものだったのかな。うまく〔言えない〕，わからない。

K さんは，沖縄に惹きつけられ，祖先や沖縄戦を調べるきっかけとなり，行動を引き起こす源泉に，「沖縄人としての血」を据えようとしている。しかしながらこれまで見てきたように，彼女が自分のからだの中にあるとみなしている「血」は，本質主義的なものではなく，短い人生の中で得た経験から構築し，使命として引き受けていく中で見出されてきたものである。彼女の現在の状況と意識が，彼女の中の「沖縄人」をつくり上げている。さらに言えば，「沖縄人としての血」を信じて，これから祖先と沖縄戦についてもっと調べようとしている自分の未来において描かれる「沖縄人」が，「きっと何か大きなもの」として予感されているのだろう。それは，すでにあるものではなく，準備状態のものであり，K さん自身が書いているように「持っていく」ものなのである。

(2) 必ず私の中にある

本稿の冒頭で紹介した文章の中で，最も重要と思われるのが，最後の2行である。再度引用しておこう。

> それは目に見えないし，自分でもよくわからないけど，
> 必ず私の中にある。

自分で書いていながら，尋ねられるとよくわからない内容，しかし「必ずある」と確信できること，この矛盾をはらんだ語りをどのように理解したらよいだろうか。

中井久夫（2004）は，精神科医としての営みの中で遭遇した，自分が現前させていないものの多くが「私」でありうるという不思議を，「メタ私」，「メタ世界」という概念を導入して説明を試みる。

> 私には，私の現前する意識には収まりきらないものが非常に多くある。私の幼児体験を初めとして，私の中にあるのかないのか，何かの機会がなければためすことさえない記憶がある。私の意識する対象世界の辺縁には，さまざまの徴候が明滅していて，それは私の知らないそれぞれの世界を開くかのようである。（中井 2004：31）

これはおもに記憶に関する記述だが，過去の記憶にとどまらず，「予感と徴候とに生きる時，ひとは，現在よりも少し前に生きている」とも述べている。ここでいう「少し前」とは「少し先」ということである。人は，意識的世界においては「現在」を生きているが，無意識の世界（メタ世界）では現在からはみ出る。予感と徴候とに生きる時は現在より少し先の未来を生きており，余韻と索引とに生きる時は現在よりも少し遅れて生きている（中井　2004：34）。

K さんが沖縄に持っていこうとしている「何か大きなもの」とは，意識の対象世界の辺縁で明滅している徴候であろう。それは単なる雰囲気的な予感ではなく，ひそかな変化としての徴候であり，祖先や沖縄戦を調べることを通して得られる「沖縄人」といった，より対象的で吟味すべき内容を伴うものとしてとらえられる。また，K さんが沖縄へのノスタルジアとして語る言葉も，過ぎ去ったものが残す雰囲気的な余韻ではなく，過去への入り口としての索引と言えるだろう。祖父が語る沖縄戦や家族から聞く親戚や祖先の話を手がかりにして，「沖縄戦」と祖先としての「沖縄／琉球」の世界に入ろうとしているのである。中井は，未来に関係する予感と徴候，過去に関係する索引の双方に，「一つの世界を開く鍵」としての可能性を見ている。

自分の中にありながら，自分が知らないもの。自分の遠い過去にあるはずだが，自分は知らない不知の祖先は，

何の根拠もないが「必ず私の中にある」と思い描く未知の未来に投影される。「過去－現在－未来」は，時系列の線上を過去から未来へと経過するのでもなければ，現在を起点に過去へ遡及したり未来へ延長されたりするのでもない，ともいえる。それは，時系列の線上の移動ではなく，一群の雲のように立ち現われたり，流れたり，拡散して消滅するようなものなのかもしれない。しかもそれは，雲自体にみずからを作り出したり消滅させたりする力はなく，気圧や海水温など周りの環境に左右されるように，他者との関係性において生成される。自己を語る，つまりアイデンティティとは，そのようなものと考えられないだろうか。

「自己を語る」ことがアイデンティティであるならば，K さんは発話の段階で「どもる」ことによって，常に自己は裏切られ傷つけられてきた。K さんは他者との関係において，文字通り「言葉を失った身体的時間」を生きてきたのだ。しかしながら，言葉によって傷つけられながら，言葉において自己の未来を切り開こうとしている。K さんは第 1 回インタビューの少し前に，学内の英語スピーチコンテストで優勝した。ただし，吃音のコンプレックスを克服するために，別の言語である英語を利用してその穴埋めをするのとは違う。「吃音者の挑戦」と題したスピーチは，吃音を治すのではなく，ともに生きることを課題とし，吃音をポジティブに考えようと決めたと宣言しており，彼女はこのスピーチが「私の大きな挑戦」だと締めくくっている。K さんは，言葉の暴力性も，そして可能性も知っているのだ。

物心ついたころから自分に張り付いてきたネガティブな吃音を，ポジティブに転換しようとする挑戦の中に，沖縄へのノスタルジアは生まれる。「生きてるのか死んでるのか，全然わからない」状況の中で探し求めた自己存在の意味は，今も自分の中に流れる「祖先からの血」である。自己の根源は他者に委ねられたものであるが，それを継続させていくために，みずから見出した存在の意味を「使命」として受け継いでいく。「沖縄人として生きていきたい」という願望とともに，使命を全うするための課題を未来に描き出す。まだ「目に見えないし，自分でもよくわからないけど，必ず私の中にある」と確信する未来から，自己の由来はやってくるのである。

注

1）私が担当する大学のある授業で，毎回任意で学生に提出してもらっているコメントの一つである。110 名の受講生に対して講義形式で行っているため，学生個人と直接会話することはほとんどなく，このコメント用紙を介して学生とのコミュニケーションをはかっている。2013 年 7 月に行ったこの回のテーマは，「平和：日常にある戦争」だった。沖縄出身の歌手で「復帰」後に生まれた Cocco（こっこ）のエッセイ『想い事。』（2007）の中から，「楽園」と「ひめゆりの風」の 2 篇を紹介した。それぞれ基地問題と沖縄戦を扱っている。

2）別の年度の同じ大学の授業の中で，別の学生が同様のコメントを書いている。「小学校の修学旅行では，よく広島に行きます。平和記念〔資料〕館などに行った時，とても怖いと思った事を，今回思い出しました。沖縄の人はまだ身近にその怖さの片りんがあるのかと思いました」。

3）アブチラガマ（糸数壕）は，沖縄本島南部の南城市玉城字糸数にある自然洞窟（ガマ）である。沖縄戦当時，日本軍の陣地壕や倉庫として使用され，戦場が南下するにつれて南風原陸軍病院の分室となった。軍医，看護婦，ひめゆり学徒隊が配属され，全長 270 m のガマ内は 600 人以上の負傷兵で埋め尽くされた（HP「糸数アブチラガマ」. http : //abuchiragama.com/［2015-10-27］から部分引用した）。

4）たとえば 2014 年は，4 月から 11 月の間に 9 回にわたり，大叔父単独もしくはボランティアとともに収集された遺骨が 12 袋仮安置所に届けられている（資料「平成 26 年度－遺骨仮安置状況（平成 26 年 11 月 30 日現在）」沖縄県平和祈念財団）。

5）冒頭のコメントの文章では，「祖父の兄は沖縄で遺骨収集をしている」となっているが，実際は祖父の兄弟たちによって行われている。

6）身元がわからない遺骨の方がはるかに多いが，それらは「きちんとお墓に埋葬される」とはいえ，国立沖縄戦没者墓苑に他の遺骨とともに納められ，決して家族の元には帰らない。

7）沖縄イメージについては，多田治（2004, 2008）を参照されたい。

8）多田はみずから行った質的アンケートから，沖縄の若者が沖縄出身のインディーズバンド「MONGOL 800」（略して「モンパチ」）を支持する理由を分析している。モンパチが「ちゅらさん」や『ナビィの恋』とちがうのは，戦争・基地・平和を扱っている点であり，沖縄の明るい面も暗い面も表現するモンパチに「ちゅらさん」より共感を抱くという（多田 2008： 219）。こうした点から言えば，南国イメージと沖縄戦のイメージが共存する「沖縄」に「祖国」を見る K さんは，沖縄の若者の心情に近いのかもしれない。

9）本人が言うには，苦手な単語や発音を避けて別の言葉に置き換えるため，頭をフル回転させなければならない。彼女にとって「話すこと」は，大きな制約を伴う表現手段である。それに比べ，「書くこと」は発話時に課せられる制約がなく，自己を解放して自由に表現することができる。自分の中にある言葉をふんだんに使い，時には表現の選択肢がありすぎて

困るほどだという。一般的に，書かれたもの（文書）は論理的・説明的であり，語りは複雑な感情までも表現される，という思い込みを捨てなければならないだろう。

10）体験者の次世代の継承については，門野里栄子（2007, 2010）を参照されたい。

文 献 リ ス ト

Cocco, 2007,『想い事。』毎日新聞社.

Davis, Fred, 1979, *Yearning for Yesterday : A Sociology of Nostalgia*, Free Press.（＝間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳，1990,『ノスタルジアの社会学』世界思想社.）

門野里栄子，2007,「〈母の死〉から立ちあがる――「平和活動者」としての主体化過程」『日本オーラル・ヒストリー研究』3：145-163.

――――，2010,「島の経験を受け継いで――慶良間諸島における『集団自決』と共同体」冨山一郎・森宣雄編『現代沖縄の歴史経験――希望，あるいは未決性について』青弓社，235-258.

『けーし風』編集運営委員会，2008,『けーし風』新沖縄フォーラム刊行会議，59.

金城重明，1995,『「集団自決」を心に刻んで』高文研.

中井久夫，2004,『徴候・記憶・外傷』みすず書房.

岡本恵徳，1992,「戦後沖縄の文学」沖縄文学全集編集委員会編『沖縄文学全集　第 17 巻　評論Ⅰ』国書刊行会，41-61.

多田治，2004,『沖縄イメージの誕生――青い海のカルチュラル・スタディーズ』東洋経済新報社.

――――，2008,『沖縄イメージを旅する――柳田國男から移住ブームまで』中央公論新社.